



受難の主日 (マルコ 15:1-39)

イエスを「お前」と呼ぶ人々

受難の主日、聖週間が始まりました。私たちの主が成し遂げられる救いの御業を、最後まで見届け、復活の喜びを迎える大切な一週間としましょう。

黙想会に参加した皆さん、本当にご苦勞様でした。私が依頼することのできる神父様の中で、いちばん真面目に黙想指導してくださる神父様をお願いしました。来年も中濱神父様でお願いしますという人がもしいたら、喜んでカレーを買って頼みにいきます。

本日の朗読箇所は典礼暦B年なので、マルコによる福音書の受難の場面が朗読されました。与えられた朗読箇所を見る限り、イエスに従う人々、イエスに同情する人々は誰一人登場しません。そのことが、イエスが完全に見捨てられたということ強く印象付けます。

また、イエスを呼ぶ人々の呼び方も、だれもイエスに同情を寄せていないのです。その中で、いちばん特徴的なのはピラトがイエスを呼ぶときの「お前」という呼び方ではないでしょうか。「お前」という呼び方は、完全にイエスを見下している呼び方です。

さて、私たちはこの朗読箇所を、どのように見ているのでしょうか。私たちは本日の朗読箇所の、どこに立っているのでしょうか。いくつか示してみますので、自分がどれに当てはまるのか考えてみてください。

まず一つは、自分が本日の朗読箇所で繰り広げられている舞台の目立つ場所に立っているのではないか、ということです。それはつまり、イエスに同情すら向けない人々の一味であり、声を出す機会が与えられれば自分もイエスに「お前」と呼び捨てにする。そういう立ち位置で朗読箇所を見ているのでしょうか。

二つ目は、私たちは全く本日の朗読箇所で取り上げられた舞台に関わりがない人物でしょうか。つまり私が立つ位置はこの朗読箇所のどこにもなく、存在すらしないと考えるのでしょうか。本日の朗読箇所で描かれた舞台と何の関係もなければ、それはそのまま、イエスとも何の関係もないこととなります。

最後のケースは、私たちはイエスに従うつもりがあるけれども、恐怖のあまり体が動かず、遠くに立ってただ眺めているだけなのでしょうか。この場合、積極的にイエスを「お前」とののしることはしませんが、かといって命を懸けることもできない弱さの中で震えながら遠くからただ眺めているだけなのです。

きっと、私たちの立ち位置は、イエスに従うつもりはあるけれども、何もできないでいる弱くはかない存在で、遠くに立って眺めることしかできない。そんな貧しい人間なのではないのでしょうか。ふだんどんなに威勢が良くても、ふだんどんな人の前に立っても動じないという人でも、四方八方敵だらけの中で渡り歩いている人でも、イエスの最後の場面ではだれもが弱く、ただ遠くから眺めるだけなのです。

いかに弱い人間か。いかに無力なことか。今は私たちは、そのことを認めるために今日このミサに参加しているのです。枝をいただいて、枝を振ればイエスの目に留まるかもしれませんが。けれども枝を振れば、私たちはイエスの仲間であり、イエスとともにはりつけにされるかもしれません。はりつけにはされたくないで結局枝を振ることなく降ろしてしまう。そんな弱さみじめさを味わって、今日は帰っていくのです。

「私は『お前』などと言うののしりの言葉は決してイエスさまに言わない。」そう思っているかもしれませんが。けれども私たちは、「お前」とは言わないけれども助けにも行けないのです。その弱さを担って、イエスはわたしたちを救ってくださいます。

聖木曜日から復活徹夜祭までの三日間、できるだけ典礼にあずかり、イエスの救いの御業を十分に学びましょう。助けることのできない私を助けてくださる主に信頼を寄せて、今日はそれぞれの生活に戻りましょう。

聖木曜日(ヨハネ 13:1-15)